廿一年五月（版權所有）十九日發兌

THE WOMAN'S MAGAZINE.

女學雜誌

東京女學雜誌社

一冊五錢 府內無稅 郵稅一錢 每土曜出版

第百拾號

社説
日本の女服改良を何如んせん
論説
勝手本にかける考案（在獨逸、太田稻造）〇家內經濟の大要（木村熊二）
叢話
離婚防禦の戒策〇細君の病氣〇八歳の童女父を救む〇江の島及び鎌倉〇辨慶と佳人が谷〜ひ〇細君と下婢の行衞〇子供私已の衞生（大澤謙二）〇百人一首（錦木弘恭）
小説
小説神髓
佳傳
エリヲット女史
寄書
文二首
小供の話
賢こき仕立屋
新報
外報
（附錄）萬國婦人大會景況錄

專賣二〇三一一、一一五　詳和堂中川昇刻

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 110, MAY 19TH, 1888.

EDITORIAL:— What shall we do about the Dress-Reform ?

LEADIN GARTICLES: —Thought in sKitchen, by Mr. I. Ōta ; Principles of Houshold Economy: No. V. by Rev. Mr. Kimura.

MISCELLANIES:— The Best Cure for Divorce ; Two Temperace Stories ; A Trip to Enoshima and Kamakura ; Wanted a Benkei and a Belle ; Children's Health (IV). by Prof. Osawa ; Where has "The Mistress and Maid" Gone ?; Short Conversations on the Hundred Odes by a Hundred Poets" (VII); Finger Rings (III), by Dr. S. Hisamatsu ;A Husband's Duty Toward his Wife in Sickness.

NOVELS:— Bouquet of Novels,
BIOGRAPHIES:— Jeorge Eliot. (II).
CHILDREN'S COLUMN:— A Wise Tailor.
CORRESPONDENRES.
GENERAL NEWS.

SUPPLEMENT:— International Woman's Council. (II).

前號(第百九號)目次

●社説　自尊の精神

●論説　兩魔王を退去せしむべし(中島俊子)○婚離法(忍月居士)○日本洋裝の婦人(イーストレーキ夫人)

●叢話　宣教師ゼー氏細君に金嚢を捧ぐ○落花豈無情哉○小供私己の衛生(大澤謙二)○瓜や茄子の花咲り○正念坊の一枚起請○愛と名譽の歌(米國一孃寄送)譯(しのぶ)百人一首(鈴木弘恭)○指環考(久松定弘)

●小説　小説神髓

●佳傳　ヱリヲット女史

●小供の話　賢こき仕立屋

●新報

●外報

(附録)萬國婦人大會景況録

●珊瑚の珠　(第六十六回)

○善を積む三年なるも之を知るもの稀れなり惡を爲す一日なれば天下に聞ゆ(晋書)

○上の目を用ゆれば則ち下も觀を飾り上耳を用ゆれば則ち下も聲を飾る(韓非子)

○聲ある聲は百里に過ぎず聲なきの聲は四海に延及す(劉向)

○天下を動かさんと欲するものは先づ自から動くべし(ソクラット)

○筆と劍と彼れ此を殺すにあらざれば此れ彼を殺すべし(ビクトル、ユゴ)

○銹びて腐るよりは摩れて耗るをよしとす(カンベルランド)

○おろかよして愼しめるは得の本なり巧みにして恣しひまゝあるは失の本なり(兼好法師)

○雪の降りたるにこずたるゝも口惜しければ彼の高峯の雪はと云ひたれば何となう打ゑみてまた立もやらずさすがに棄てもおかず童あんどにあれかゝげ玉へよあとほのかに云ひしこそよけれいとも女はかゝるべし(白河の翁)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第百拾號
明治二十一年五月十九日發兌

社説

○日本の女服改良を如何にせん、

南風吹起れば波、北に躍り、北風吹起れば波、南に走る、左れど風止めば則ち、波濤靜かにして水平油を流すが如し。磁石、之を動かせば其針東に向ふ、更らに之を一擲するに針更に西に向ふ、然れども動搖止めば則ち、鋼頭依然として北方に朝す。之れ實に物の自然にして、侵すべからざるもの也。日本女服改良の大議論、殆んど其跡を沒して、洋服採用の熱心家、恰も消るが如くに成り行きたるは、蓋し、流行論の恐慌漸く鳴りを鎭め、時勢復び着實の故郷に歸り來りたるものなり。吾人眞とに之を祝す、而して之を祝すると共に今ま揚言大呼して、別に「日本の女服改良之を如何にせん」と質問せざるべからず。

二年前、洋服採用の熱病大に流行したる時に當り、吾人が冷々然として之を接待し、若し止なくんばペチコートを用ゆべしと申し置きたるは(女學雜誌第五十三號社説及圖を參看せよ)、蓋し讀者が尙ほ記臆せらるゝ所ならん。然れども、今まや女服改良の議論將に消滅して、洋服採用の立議案の斯迄に冷待せられんとするに至るを見ては、吾人即ち躍然一起立して、平生の卑見を陳べざる可らず。蓋し物は、乾より坤に走り、一變轉ごとに常に反動の極に走るを常とす。左れば元來、洋服採用の事は、左程までに汗を流して論ずべき問題にあらず、然るに、當初は、之が爲に夜の目も寢ずして、强いて其の流行を製造したるものもあるが故に、今や風向一轉して、既に下火の方角に向へば、扨ては、世人が之を冷待すると亦た一層に嚴しく、素と左樣に手强く之に反對せずも宜しきものを、今は一層に惡口し、洋服速かに退去せざる可らず、和服速かに復古せざる可らずと、慷慨せらるゝ向も尠からず。狀况殆んど憫笑の極に堪ずと云へども、然れども吾人は、今ころ洋服の爲に正當の辨護人となり、以て其の眞價を世に明白にするの責任ありと信ぜり。

抑も、衣服とは、躰を護るもの也、然れども又之を飾るものにあらずや。左れば、雨降れば之を脱ぎ、チヤンと疊んで肩に掛る印度人より、今の交際塲裡一種の婦人方に至るまで、當に其肉躰を被のみならず、更らに之を奇麗に見すると云ふ、美術意匠上の大目的あることを覺悟せざるべからず。此の故

に、衣服の躰は、當人の有樣及好み、の相違するに隨つて、亦た共に變化する所あらざるべからず。子供の時は、子供の衣物を着たり、左れど大人に成りてよりは、亦た大人の衣物を着ざるべからず。働かぬ時はお引ずりの長衣裳を着たり、左れど働くときは、夫相應に輕く裝はざるべからず。裾の短きが美術に適ふと心得たるときは、之を短くもすべし、左れど振袖が見榮宜しとの輿論と成らば、則ち亦た長袖能く舞の京女郎をも眞似ざるべからず。之を以て、其上み、天照大神は、荊棘に破られぬ樣に、齋服を製り玉ひしなるべし。古代の婦人は、人に見られぬ樣に、意須比をも掩ひたるべし。三韓の洋風が流行する比ひには、野日宿禰的の韓服をも着たるべし、呉の國の職工が渡來してよりは、亦た自から呉服の美を慕ひしこともあるべし、而して、又婦人一般に紅いのはかまをも着けたることあらんに、其不都合を感じてよりは、則ち亦之を廢せしこともあるべし。之を以て、「かつぎ」も今は妹背山の豆腐の御用に名殘を留め、「十二一重」も、只だ三月の雛人形と昔しを忍ばせ、皆な其折々の事情好みに隨つて、段々と變化せざるべからず。然らば則ち、明治當代の婦人は、其の有樣及び其の好み、全く昔しとは一變したり、之が服裝の隨つて一變せざらんとするも到底出來難きことにあらずや。蓋し、御家内と云ひ、箱入娘と云ひて、只管に之を閨門の内に閉込め、門外の運動をも許さず、活潑なる仕事をも爲せざりし昔日には、今の女服、恰も好く適當したるものなりき。然れども、既に當今の時勢と相成ては、最早や、斯る制限を主として窮屈なる衣服を裝はしむべきにあらず。況んや、淸潔なる亞米利加人をも夷狄の如くに心得たる、維新前の日本婦人とは違ひ、既に其學問も、其の感想も、甚だ多く西洋の文明を味ひ得たらん當今に於ては、其衣服上の好みに於ても亦た、大に變化する所あらざるべからず。之れ、自然の情勢にして、決して制し止むべきにあらざるもの也。

女服改良の氣運、正に必要より生じ、敢て之を製造し、故意に之を強ゆるにあらずとせんか。然らば、則ち、眞正の女服改良は、亦た其の必要の中點よりして成立せざる可らず。苟くも之を必要上よりして改良せば、好し、日本の女服が、全く唇黒きアイノの女、もしくは足小さき支那の女の、裝ふ所に似るとも、吾人は絶て之を遺憾となさず。必要の地に行て、必要の點に止まり、進退動作、一に其必要に安んず、之を君子の、綽々として餘裕あるものとこそ云ふべし。然らば則

ち、今の日本女服は、之を如何にすべき。抑も之を何如程の地に至る迄でに、改良するの必要ありや。

玆に至つて吾人は、靜かに答辨すべし。上流の婦人は、時として、洋服に改めざるを得ざるの必要あり。中流の婦人は、多くは、別段に和服を全廢するの必要を有せず。下流の婦人、及び、勞働を專らにするの婦人方は、都合により、之を洋服にするの必要あらんと。而して吾人は、其の必要の度に應じて、それ〴〵に從來の服裝を改めんことを希望するもの也。

當今、頭を垂れ息氣を凝らし、喘々焉として不運の成行を心配せらるゝ、昔日の洋服採用軍中の勇士諸君よ、諸君が今の如くに失敗せられたるは、盖し或は其の豫算を誤られたるの不覺悟に出づるにはあらざるか。諸君は論じたりき、洋服は交際上に都合宜しと(眞に然り)、經濟上に宜しと(眞に然り)、便利なりと(眞に然り)、美術上の見榮宜しと(眞に然り)、然り〳〵、實に一々其眞に迫るの名論なり。然れども、交際上の都合の爲めに之を裝ふとは、只だ上流の婦人に就て云ふこと也。便利の爲に之を裝ふとは、勞働社會の婦人に就て云ふこと也。經濟に宜しとは、質素淡泊の洋服を裝ふものゝ爲に云ふこと也。美術上の見榮宜しとは、天地ともに西洋人に心醉するものゝ初めて承知する所あり。左らば、諸君の議論一々尤もにてはありしが、之を尤もとしたるは、即はち四種の婦人方が、皆な其一分部をのみ尤もとしたること也。故に、苟くも此の四つの理由を合躰して、之を悉く一種の婦人方に承知せしめんとするは、恰かも是れ、此矛突通し得ざるものなし、此盾防禦し得ざるなし、則ち兩方を買ひ玉へと奬むるに異ならず。其の折角の忠告も、乍まちにして棄らるゝに至らんは、固より當然の數と云ふべし。而して、諸君は今ま、當然の數に随て、有躰に失敗したり、是れ實に止を得ざる世の成行と、觀ずるの外なきもの也。

左れば、吾人は今ま、從來の失敗の原因を明白にして、洋服採用案の棄てられたる所以を直記し、當今の不仕合は、敢て洋服彼自身の惡きにはあらずと辨ずべし、

一。鹿鳴館にて躍るには、和服足に纏ふて不都合也。洋服の主人に同伴し、西洋人と交際するには、和服の見榮宜しからず。則ち、以上二つの必要に迫まられて、洋服を裝ひたる婦人は、實に是れ、止を得ざるの勢ひよりして、改良を行なひたるもの也。

左らば、如此き婦人方に、コルセットは惡るし、佛蘭西形

の靴は不健康なりと云ふと、抑も野暮の至り也。又、洋服は不經濟なりと、今更ら大悟を開くも、亦た愚の至り也。既に右第一條の二つの理由よりして、洋服を採用せば、多少の不健康と不經濟とは、初めより覺悟の上ならでは、適はず。

然るに、此の覺悟なかりしが故に、悲しくも失敗したり。

二。和服は、裾を蹴出して、野蠻人の風あり。洋服は、優雅にして、見榮頗る宜し。左れば、和服を棄てゝ、西洋服を取るは、蠻風を離れて、文明の仲間入をするもの也とて、洋服を採用したり。是れ又た、一つの必要なりき。

然るに、西洋人の多くは云く、洋服は日本婦人に似合はず、和服の方、遙に美術に適へりと。

如此く、當の相手に嫌われたるが故に、哀れにも失敗したり。

三。造幣局にて働らき、砲兵本廠にて遣はるゝ程の女子、又た家内にて、西洋の細君風に活潑に立働らく婦人方には、彼の淡泊質素なる平服の洋裝が宜ろし。如此くに改良するは、實に其の改良の必要あるもの也。

左らば、如此き婦女子には、便利の爲にも、經濟の爲にも、洋服を取用ゆるなれ。苟くも然らば、斯る輩は、コルセットを奬めたりとも、決して之を用ひざるべし、佛蘭西靴を與ふるとも、之れを不都合なりとして棄てゝ顧みざるべし。

然るに、彼の勞働社會の女子に、此の便利を味はしめたることもなく、又家内の活潑なる細君に、此の雛形を示したることもなし。故に殘念にも、失敗したり。

實際の事情、果して右の如くにてあらんか、左らば、吾人は一々、左の如くに判決するの止を得ざるを信ず。

一。交際社會に有觸れたる、洋裝の不經濟と不健康、とを恐るゝならば、最早致方なし、斷然、之を廢するの必要あり。

二。切角見當にしたる西洋人に、嫌はるゝならば、凡そ西洋人好きの方々は、最早致し方なし、斷然、洋服を裝ふことを廢するの必要あり。

三。實用的に洋服を用ゆるの必要なく、交際的に洋服を用ゆるの方便もなき人々にして、彼の和服の裾の露るゝを嫌ふか、玆に、即ち、吾人の卑說を採用して、ペチコート狀の下着を穿つの必要あり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

四。彼の勞働を主とする活潑の婦女子は、何卒、洋服を用ひよ、男子も働くときは、殆んど洋服に似たる日雇衣を裝ふ、女子の勞働せらるゝものも、亦た之と同樣に裝ふの必要あらんとす。

嗚呼、若し如此き最後の必要よりして、洋服我が女流の間だに流行するに至らんか、其の流行や、實用平民的の需要よりして來るものなり。左らば袖の自由なるもの、自づからに尊とまれ、裾の輕やかなるもの、自づからに尊とまれ、腰の衣心能きもの、自づからに尊まれ、コルセットも廢せられ、詰物も廢せられ、もろ〳〵の引張物の具も、廢せられ、靴は平らかとなり、帽は、輕易となり、惣じて、窮屈、不便、不經濟の附き物は、一切に無用となるべし。此の如くして、女子洋服の我國に行わるゝ、幸いにして一度び此の門よりして入るを得ば、彼の歐米に於る有爲の婦女子が、熱心に主張する洋服改良の議論は、之を彼地に於て實行するは眞とに至難なるべし、之を我國に行に當ては、其事眞に容易至極にして、恰も之を放任して尙ほ其の行はるゝを見るの愉快あるべし。然らば則ち、日本の女服は如何にすべき、曰先づ勞働社會よりして洋服に改ためよ、斯くて漸次に其流行を上登し、彼の家屋の改良せられ、財產の增加せらるゝに隨つて、一般の女性、皆な漸次に此の第一例に隨ふを可とす。之を以て、吾人は今ま、女子洋服熱の大に冷却したるを喜ぶ、然れども、亦た其の冷却の大に反動に走らざらんとを祈る。流行の風は、宜しく己が儘に吹くべし、左れど實用平民的の空氣よ、汝ち希くは、我が女服改良界內を立去ると勿れ。

論說

○勝手向に於ける考案

在獨逸學士　太田稻造

左は當今獨逸暮溫に留學せらるゝ社友太田君の寄送に係るものなり原と英文にて起草せられたるが故に客員若松しづ女之を平易の俗文に譯出したり。

私はなる丈西洋の風俗を見聞する事を望み升から折々勝手本とて食事を致升。さて今朝例の通りに勝手に居升と折しも女學雜誌の配達が御座り升た。女學雜誌が婦人の專ら管轄する勝手本に來臨する杯は甚だ當を得た事では御座りませんか獨逸の哲學者ヘイゲルが戯てソクラチスにして其理學を天より持降れりとせんか英人は是を庖厨に引込たり」と申升たが私は日本の勝手本よもそつと學術と理學の用らるゝ日を切に望

み待つもので御座り升なぜとあらば婦人の伎倆の最も顯れるはこゝで御座り升」ある社會學者の申ましたとに自由の歷史は世に始めて鋤を用ゐた其時に始まつたと御座り升言葉を變て申ますれば自由ある者は人の手間を省く機械の適用の多寡に依る者で手間を省く機械のある處にて物事を考へたり鬱散し遊戯をしたり讀書等の事をする時間も自然出來て參り升かのアリストートルが機械が不完全なる間は奴隷といふものが存在せねばならぬ譯だと申ましたも矢張り此道理で御座り升さて日本の婦人を救ふて萬事ゑ自由を與へんとならば先第一に勝手本をきまりよくし理學を用ゐさせ機械を備ふる事が得策で御座り升。アデンソンが雜誌を發行いたし升時に其趣意を述て理學を家々へ引入る爲だと申ました。私は女學雜誌もかくあらん事を望むもので御座り升」男子と學者は兎角勝手向の事を充分重んぜぬもので御座り升動もすると此一家内の最も大切なる部分の事を輕々敷云ひはなち升。凡そ一國内の經濟は農業が其基であるならば凡そ一躰内に甞てベイコンが申た通り胃臓か帝王であるならば勝手本は一家内の經濟より申さば其基礎となり王宮なりで御座り升。さらば一家内のみならず社會の組織中に勝手本を占て居る大切なる位置を手みぢかに申述ませう」婦人は男子の飲酒に不節ある事を難じられ升がこれも大概勝手本に究理のなき爲で御座り升日本の婦人方は格別に此點に御注意あり度願ひ升。なぜとならば只今日本の人民は野菜を食するより急に肉食に移變る塲合で御座り升から格別アルコウル性の飲料を欲する傾きが御座りませう」衛生法に適ふたる食物の献立に餘程注意をせねばなりません。

もし或る英人がアイルランド人の爭闘一揆は薯を食する事に據ると申した事が實事ならば我等日本人は此説より教を採る事が出來ませう。衛生會と駒塲農林學校の近頃の報告に依れば日本人民が甲斐〳〵しく勞働するには滋養が不充分だと申す事は疑ひもなく明瞭で御座り升。彼の一二年前世間に騒が敷論評いたしました人種改良論は勝手本に容易なる解を得るだらうと存じ升。」勝手本の家内に尊い位置を占めて居ることは一家族の費用の過半がこゝに集る事からでも判然いたして居り升。獨にては中等社會にて家内の費用の五割八分下等社會にて六割二分が食物で御座ります。合衆國にては五割或は六割で矢張其様に費へます。日本にては何程費へ升かは記者よりは寧ろ女學雜誌の讀者の方がよく御承知と存じます」勝手本は亦た教育塲と爲ることの出來る事を忘れてはなりませ

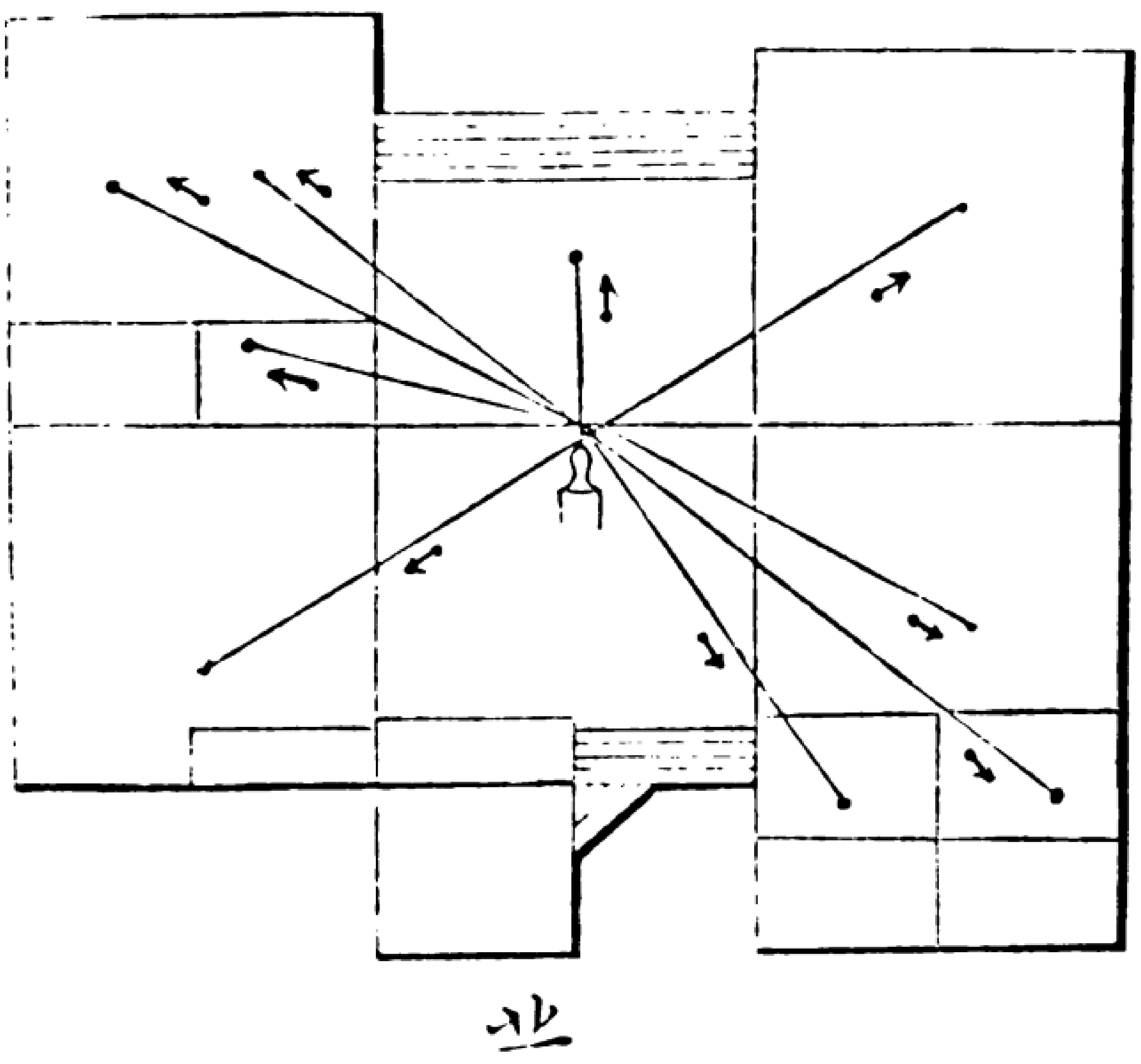
ん。もし一家内の細君たるものが其支配に少しく理學を用ゐ升あらばこれを化學試驗場とも事務學校とも爲る事が出來ます。はやい所が我等の姉妹が簿記法をもすこし注意し、調理法に化學の規則を用ゐ、舊來の竈に夥しく薪の消費する事などに思付なさらば何程の實際教育が出來ませうか。格別に私は烟出し建築の事についてもそつと物理學を適用して戴き度ふ御座ります。烟出しの事に付きましては日本人は歐洲人に七百年も後れて居ります佛人は西洋風の烟出しの製造を始めた名譽を以て居り升。英國に於てはヘンリ第八世の時則ち今より三百五十年頃に西洋風の烟出しが一般に用ゐられるやうになりましたがこれは煉瓦の製造の盛んになつたからで御座ります。百年程後即ちチヤアルス二世の時に烟出に租税を課しましたがこれは甚だ馬鹿げた事で御座り升が。若し我政府がチヤアルス二世の政度をあべこべにいたしまして西洋風の烟出しの建築ある家の家屋税を減じましたら日本の家屋に結構なる改良が行はれませう。歐洲に於きましては烟出しの建築に續く家屋の建築が丸で變りましたが日本にても左樣にあり升まいか。ある人は西洋風の烟出しは價が高いと申して難じ升、左樣ならば煉瓦が廉價になるを待ませう。」私しは勝手本ハ實地の試驗や適用をする化學試驗場のやうである筈と申した。さて日本の食物が既に不充分で御座ります。と申して充分ある事にしやうとするには懐合の算用が足らぬと申す所で私しはこゝに推切つて申し度き事がある則ち食物の撰方と調理の仕方をさへ注意すれば金錢を左程に費さずに滋養分が得れるといふ事で御座ります。此事に付て巨細に述べ度いが此投書文の餘り長くなるといふ氣づかいが御座り升からそれはいづれかの衛生家に願ひませう。」勝手向に薪木の消費るといふ事に付ては宇都宮ストゥブとかいふ近頃發明になつたものを用ゐれば薪木の半分方も倹約の出來ると云ふとを御忠告いたし升。それから日本の日用の食物即ち飯を多少に係わらず戸毎に炊ぐ事と歐米の人々の都鄙に係わらずパン屋より日用の食物を買ふ事をお考へなさい。日本國内の戸數を七百七十四万と見做て戸毎に飯炊する事で消費する高を一年に見積て幾許になりますか讀者御算用なすつて御覽なさい。(未完)

○家内經濟の大要 (其三)

木村熊二

我が邦が風として夜間睡に就く後も燈火を點じ置く家あり夫は盜賊の難を避けんと警戒するものゝ如しといへども衛生上には非常なる害を與るなり夜間は燈火を消し枕頭にマッチと

西洋燈燭を備へ置べし又食堂などには必ず同樣の用意に惰らす非常急變の時は直ちに點燈するに便ならしむべし余嘗て一軒の屋を築き食堂に燈火を點ずれば全家悉く明らかなる樣に注意せしが近火などの際には一人起て燈を點ずれば全家狼狽するの憂なからしめたり夫れ石油の節用の爲のみならず衛生上に大なる關係あればなり。

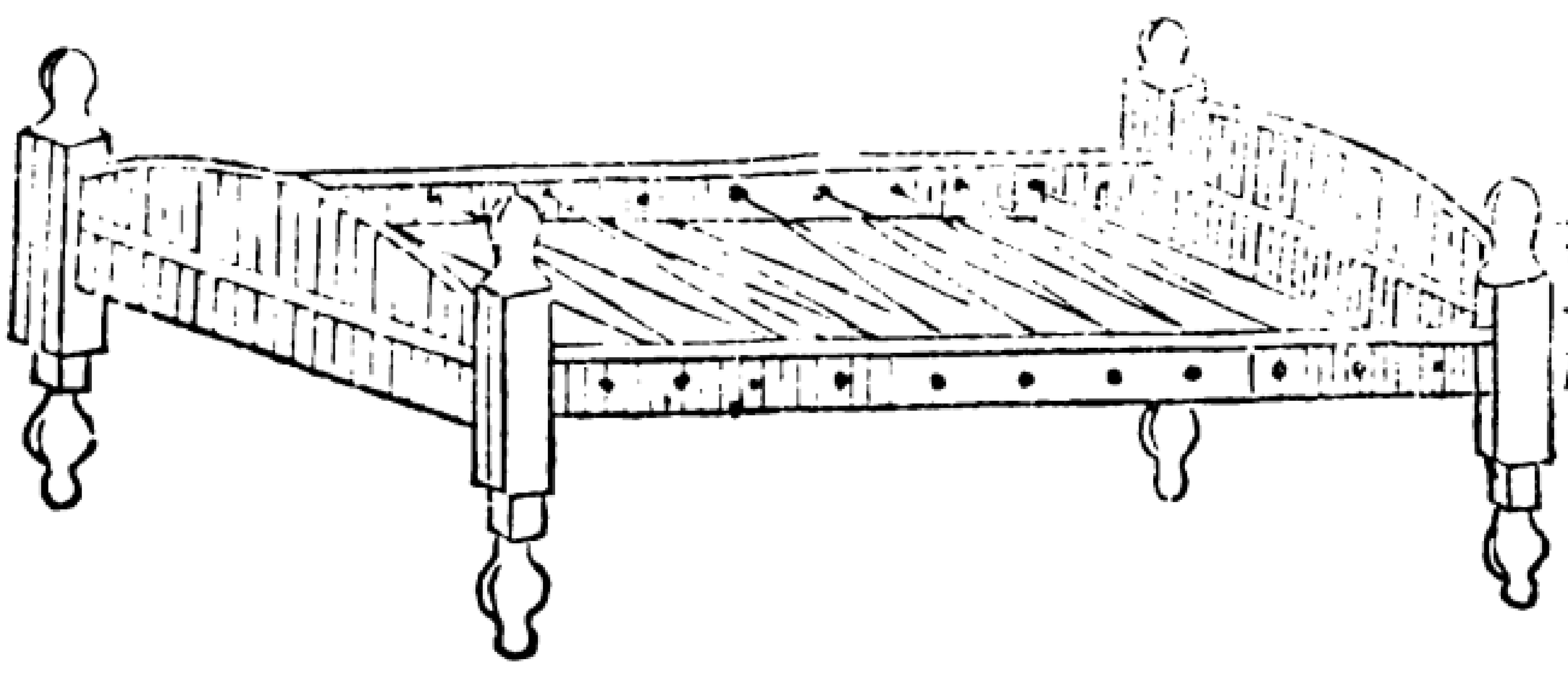


家を整頓せんには秩序規則なかる可からず加茂長明の方丈の如く山水幽清の地あれば其の處に移り柳暗花明の村あれば又其の方へ轉宅する輕便なる家屋か顏回が一簞の食一瓢の飲にて天命を樂みギリシャの聖人が大手盥の中に坐して大陽に背をさらして世を渡りたる風にて十九世期の人々は中々承知せぬものなり一ツ場所へ一年二年住詑れば坐有の手道具より庖厨の什物まで追次に增加して棚も所せきまでに成ぬべしされば裝置法宜を得ざれば甚だ亂雜に趣き易くして入用の器皿を得んとて數時間の探索を要し或は何の頃にか破壞して洋犬の食物を盛る皿となりなんされば器皿は必ず類を分ちて食堂の棚に置き使用して後は故の場所に置くべし平素使用する器皿茶碗の類は食卓の中に入置くも大に便利なるべし。

衣裳は塵埃に染み易きものなれば着用したる後は必ず塵を拂ひ披展して之を簞笥へ納め繻袢股引等は一周間毎に之を更へ必ず之を竹籠か或は小き簞笥へ置き洗濯日を定め置きて之を少しの石鹼にて煎し汚穢ある處のみを強く洗ふべし婦人の常として衣裳を澤山所持すれば此の上もなき幸福にして心に愉快を感ずるものなり招待に赴く時の衣裳散步へ出る時の衣服各一襲平素着る衣類二襲もあれば事欠くべきにあらねども同し衣裳を度々着る時は「判にて押た樣なり」とて簞笥一杯衣裳を作らずんばあらずといふ風習あり良人退省して坐漸く定り

唐桑の烟草盆を光澤布にて一拭了て忘憂草の薄烟咽喉に通るや通らざるに細君は満面に笑を含み乃公は昨日隣邸の令孃が縞がすりの縮緬に博多の帯を結びたる姿を如何に看了し給ひしや又彼處の夫人の節糸織に繻子の腹合の帯はよく似合たると思召さずや追々夏も近にあり乃公の月給は何時入手かと云ば主人は沈默良久うて諾矣々々と云ふの外他に返す辭もなかりき季布の一諾ほど確實あらねど細君は先つ安心の躰にて座を起て庖廚へ入りぬ妾の身躰は學問と才藝にて飾りますといふは表面にて兎角花麗なる衣裳の目に注くは婦人の僻なれば戒むべきとあり昔し梅聖兪は家貧くして衣服飲食にも不自由がちなりしが妻は自己の衣は洗ひざらして縞も分明らぬ程なれど良人には可成丈完全なる衣裳を着さしめたりと然るに今や良人の衣は垢にて光輝を生じ沓足袋には穴あり鈕釦は將に落んとするに細君の装飾のみ善く行届きたるは却て見苦しきものあり欠乏あるものは之を買ひ求むるも差向入用あらざる衣裳什物を買ひ求之を筐裏へ納め置くと經濟を知らざるものゝ爲る所なり其の費を他へ用ひて大に利益を生するの方法あるべし西洋服は着用したる後は好く之を掃ひて納戸或は衣筐の釘に懸け置べし簞笥へ之れを納置けば自然臭氣を生ずるものなり簞笥衣筐は必ず寢室に置き衣裳を他室へ運びて着かへすれは塵埃は他の物器にかゝりて清潔ならざるものなり。

寢室の有無にかゝはらず臥臺は必ず用ゆべきものあり疊の上に起臥し二枚折の屏風は枕邊を半ば圍み烟草盆と湯呑は其の右にあり一卷の書は半ば繙きて枕上にあり南華經なれば蝶となり周となりつるともありあんに東海道膝栗毛あれば如何ある夢をや結つらん或は六曲の屏風を建廻し繻衾角枕に夢未だ央ならず遲々たる銀漏夜ハはや三更なるとを報ずる頃殘燈は豆を爲して明又滅室内の空氣に滿ち疊の上に沈澱みたるガスの臭氣に鴛鴦の夢驚かされ起坐れば眼は斑を成し鼻穴は乾き頭は痛みを覺へて再び安眠する能はず萬感蝟集してさてもこの夜は長きかなくと輾轉反側して終に曉に達したり次日身躰疲羸して睡魔の爲めに困められ何事をも手につかずうかくと半日を消遣するも實は疊の上に臥したる結果なり余近時輕便なる臥臺を製作して之を試む



高二尺

るに安逸あると彈機の臥床と異るとあし晝間は棚の下へ入れ夜は取出して蓙蒲團を要せず厚き蒲團一枚を上に敷きて臥するに身躰に痛を覺へず蚤などに苦めらるゝ患あし又十二三の童女といへども運搬するを得べし夫れ臥房寢室なき家には最適宜の臥床といふべし今圖に就て之を了解すべし。（未完）

（我邦の紹）其時お上の答へには、之れは古へより多く類ある疑似の件なり。昔し一人申すよう、私はウソツキなりと、其人實にウソツキならば是れ即ちウソを言ひしにあらず、既にウソを言はざるに之をウソツキと申さるべき乎。又むかし或る狼子供を奪へり、其父狼に面會してどうぞ之を返し呉れよと云ふ、狼の云く汝ち若し吾が問ひに本當に答へたらば之を返し與ふべしと、其父眞に然すべしと約束したれば狼の問ふよう、吾れ此子を返すべきかと、其父も然りと云はゞ、狼は之を保ちて汝の答當らずと云ふべし、もし然らずと云はゞ、狼則ち喜んで其子を保つべし……。門番恐る〳〵申すよう左様の御引例よりも先づ速かに御指令を戴きたう存じ候。暫らく次號まで待て。

叢話

○離婚防禦の錦嚢策

監督パーチット氏云く彼の「スヰツルランド」のベルンに於ては離婚を要する夫婦を二週間内一室に閉ぢ込め膳一つ食器一つ寢床洗具一つ凡そ日用必用の品大抵皆な一箇にして兩つを備へず但夫の心得べき箇條書及び妻の覺悟すべき說諭書の雙方相異るあるのみ凡そ斯の如くにして後ち尙離別を言ひ張るものは則ち之を許す然るに多くの離婚請願人は二週間の後ち大抵皆な其の前意を取消すを常とすと云へり。

評に云く、是れ彼の名奉行が兄弟の爭ひを止めたるの策に同じ、因て思ふ日本に離婚多きは其一因家內に他人の雜居する多きに基づく故に若し此の錦嚢策を施してのちに離婚を許さば蓋し彼の不幸を減ずると尠からざるべし。

○細君の病氣

津田翁近頃ろ近縣を漫遊し到る處ろ「酒の害」の演說を爲す前後三十餘日合して四十八回の演說を催うし總べて二萬餘人に所思を述べられたり吾人此頃ろ翁を訪ひ右漫遊中の美談を聞きたる多かる中に、上州藤岡に某十兵衞と云へる人あり平素太たく酒を好み氣性あらく〳〵しくして屢〻妻を鞭撻せり然るに翁の著書を讀て大いに解悟し斷然飮酒を禁ぜんとを思ひ立ちぬ然るに翁は更らに之に說き勸めて云く今ま一度び舊つて多年の惡習を止めらるゝとも積年の慣らひは亦復たび起り易く他日一杯は可なり二杯は可なりとして遂に思はずも前日に立歸るとなしとは云ふ可らず抑も私しが此の「酒の害」と云る一小册子を著はしたるも亦た斯く所々に之を演說して巡わり參るも必竟一つの原因あるゆえあり即はち新約全書と云へ

る致書のあつて吾等に教ゆる所あればあり君すでに禁酒せり願はくは一層に進んで此書を讀味はるべしと勸められたるに亦た大に感發して早々に之を買求め汽車中二時間の往來にも敢て離たず讀通したるうちに「汝ち其敵を愛せよ」とある一句に至り又た「汝ち其妻を弱き器の如くに待遇すべし」とある一節に至り非常に從來の罪業暴戾なりしとを後悔したり斯て其家に歸るに細君は兼て貯へ置たる精撰の蠶卵紙は悉く鼠に食去れたるを發見し必竟其の落度によつて掛易なき重寶を失ひたるを以て平生の良人の氣性ろも何如ほどにか打ち叩かるべきやと思ひ先泣哭して之を謝するに某和らかに其の肩を撫で靜かに慰めて去るもの丶復た歸る可からざるを諭し寧ろ之を憂ひて其身を損せざらんように介抱せりとぞ而して津田翁が其村に來つて演説あらんとする時某は二里四方を奔走して自から其廣告を張り付け單身万事を用意して扨て開會せんとするの時頗かに端紙を翁に送りて謝して云く

兼て酒の害を拜讀は致したるが其の御演説は今日初めて承わり得べくと樂しみ多少奔走も仕り準備相整へ候に付ては之より開會の都合と可相成候然るに急に妻が不快に付き介抱いたさずば成らず殘念ながら欠席仕候云々

翁は演説を了りて後ち聽衆に告げて云く

某氏定めし當席に來りたく兼て切望せられたるべし然し會の主會は友人に賴みても出來べく細君の病氣の介抱は其の夫あらでは出來がたし聞く前日には事あるとき十日二十日も叱り散らし打ち懲らしたる暴逆の良人今は乍まち斯の如き温愛の良人と爲らるゝ之れ抑も何の元因によれる乎」と

○八歲の少女、父を諫む

又た翁に聞く某鄉に某と云へる醫師あり平生暴飲す其女八歲餘りなるが「酒の害」を讀んで酒を飲めば遂に躰を損じ產を破るべしとある致話を悟了り父の前に出でゝ「アナタが若しお死になり身代が亡なつては困りますから何卒酒を止めて下ざい」と云ふ父は「今に止めるから」と云ひて之を外づしたるが翌日客を招き宴を開かんとするとき若しも娘めが人前にて左樣の事申しては相成らずと案じ之を招いて云ふよふ今日計りはお客を召んで酒を飲むが此後ちは止めるから色々の事を申しては成りませぬ此を與ふるほどに出でゝ遊び玉へとて十錢の銀貨を渡せり少女沈默沈思したるが急に立つて手文庫の内より貰らひ蓄わへたる三拾錢の銀貨を父の前に並らべ「之を上げるから何卒酒を止めて下さい」と父慟哭して則ち客を辭

し宴を中止したり。

編者云く。「酒の害」と云へる小册子は津田仙君の著にして東京婦人矯風會の出版に係るもの也吾人は其の能く非常の功を爲すを祝し請んで世人が溜よ多く之を一讀せられんとを勸告すべし(一册四十頁定價十錢)。

○江の島

女學子頭部に痛みを覺え數日出でゝ都外に逍遙遊す此時先づ相州江の島に渡りて風光を觀るに富士の山は海上に浮み白砂は洋中に横わる兒の淵の碧濤を蹴つて白ろき神窟の岩腰を穿つて暗らき皆な是れ熱沓の京地に於て影にだも在るまじきものなり然れども余れ之を以て大に觀るべきものとなさず日暮客舍を離れて島西の漁村を吟行す。漁村字なを獵師町と云ふ町の長さ僅かに三丁路幅漸く六尺左右茅屋を櫛の歯の如くに比べて凡そ一百二十戸あり余れ之を往來すると前後兩回憮然として歎き又怡然として欣び轉たゝ去るに忍びざりき。只見る漁夫は一日の荒仕事を畢つて歸り妻は終日の賃仕事を終へて迎へ兒は讀本草紙を仕舞つて今ま自由に遊びわりく、見よ老父は薪を燃やして湯を温ため壯者は僅かに躰を拭ひて足を伸ばし少娘は屋隅の化粧臺よ向ひ少年は髮結床の入口に待てり妻は子を抱いて之に接吻し夫は之が前に立つて兒の頭を弄そぶ老母肩に孫を負ふて口に吟む小童四五繩を繋いで相追ふ彼の惡戯好の子供は船を浮めて漕法を學ば兄は笑て岸頭に立り若者手拭を鼻の首に結んで徘徊すれば佳人は三四耳語して之を指し評す嗚呼樂ひ哉屋は低く室は暗し左れど是爭ひなきの家屋幸福多きのホームなるべし。全村山を負ひ海に枕む風は樹技を動かさずして波濤大に起り暮色すでに黒く遠山淡墨の濤を引が如し而して未だ絃聲を聞かずして激波のどうくたるを聞く余れ躊躇して去るに堪へず强て歩を轉ずるとき新月富岳の北端に出て美人の細眉を見るが如くなりき。

衣褋只濕千行涙、扇子空留二首歌、相對無言愁思切、暮鐘爲レ執促二歸家一。

(信夫の里の人、白休誠士)

○鎌倉

鎌倉に遊んで先づ尤も感ずる所ろのものは舊跡の區域の甚はだ狹く小さきに在り、嘗て某隨筆を讀むに巧みに源家北條の貧しかりし買證を擧げて其上みの結搆敢て今人の想像するが如くならずと論じぬ余れ今ま玆に來つて亦た同じく笑ふ。義經の妾靜石大將以下列座の面前に於て舞を奏ししづやしづ賤の緒卷くりかへしと朗吟したる樣傳すされど若し當日の大會を催したりと云ふ若八幡の祠堂を見ば歷史上の面白味も忽焉として消え失せ靜が蹴立つる足拍子の塵は定めし頼朝の面てに迄近づきたらんとは思はる扨もく万物の狹く且つ小さき哉

、然れども鎌倉政府の城跡は一睡の夢の如く日本總追捕使の邸地は今ま寂寥を生ぜり嗚呼彼處は稻村が崎の海頭なりや此は第三皇子の土窟なるとか大藏山上空しく源頼朝の墓を存し時政の墓邊農夫餘念もなく耕作せり余れ戀々として昔日を懷ふ只だ案内者が意味もなく古事來歷を暗誦するを聞くのみ。

茲に當路の君子に告ぐ。右鎌倉名跡陰石と云へるよし元と政子が姫石大明神とか號して寄依したる趣なれども當今の時世に於て此樣なる淫猥の形を表せるをあり〳〵と公けに示させ而も之を一つの偶像として尊信せしむると何等の怪事ぞ外國人が茲に遊歷する日に日に多し彼等之を見て果して何とか評すべき然らざるも吾人は直面して之を見るにだに忍びず況や彼の父子夫婦相伴ふて茲に至るものをや凡そ姦淫の空氣の濃厚と爲るは一に此如き不道德物の公けに示さるゝに由る吾人は社會道義の爲に、女性慾躰の爲に斯る怪物の一日も早く取除かれんとを熱望して止まざるもの也

叢話

〇子供私己の衛生（其四）　大學教授 大澤謙二述　佃與二郎筆記

是れからは着物のことですがソレハ既に一月の會にお話があつた樣ですが手足は十分に動けぬ樣に、緊く着物を着せてはなりません品は軟かき木綿がよろしい毛糸の猪衣薄き「フランチル」などは最もよろしい日本の着物ではアノ緒がわるいです腹を縛るのでなくして胸を緊るので其爲めに胸がヘコムと云ふ樣なことがあるが是れは癈めなければなりません又染色などのことに就ては大方お話のあつたことと思ひますから述べません生長して洋服を着る時も彼の襟などは無い方がよろしい餘り緊めますと血の環りを惡るくします又襟卷なども入りません少し感冒ても構はん成るべく少し寒い位にして育てなければならぬからアンナ物はよくない總て上等の所に多いが寒いだろうと云ふので着物がからだの厚みより厚くデク〳〵して居るのは運動にもわるし又慣となると矢張ソレ丈着なければ濟まぬ樣になるから成べくは薄着がよろしひ故に食物は貴人の樣に着物の數は貧乏人の樣にするがよろしい靴なども能く注意すべきです近來は靴が流行ですが固い靴や緩過る靴はいけません次第に成長する時ですから足が靴なりに成長します能く注意しなければならん然し寧ろ狹いよりは緩過る方がよろしいと思ひます。

第三は居間のことです居間の暖さは攝氏の十五度より二十度で（華氏の五十九度より七十七度）急に冷温ありては惡るいヨカニ日の光りのあたる所がよろしい鉄の「ストーブ」抔は勿論危險にてわるいソレから部屋の内には物を置かぬとオモチヤに腰掛ぐらゐにして角稜のある者は置かぬがよい又た寢處を居間と別にするがよろしい居間も寢間も八釜しい所や狹ぐるしき處では往けません可成は家のうちよて一番好き部屋を與

ふるととするがいゝです。
夜具は軟かき木綿かフラチル又は毛の織物がよろしい被衾は成丈け輕きを貴ぶ床の拵へ方には色々有るが歐羅巴風にすれば格別日本風の蒲團なれば先づ此位で宜しい蒲團の皮だけむいて洗濯する事是れは能く氣を注けねばならぬとて身即ち綿羽毛の臭ひを嗅でみて臭のあるのは直ちに蒲團に用ゐてはなりません又母親其他のものと一所に寢ると是れは如何にと云ふに一所に寢ぬ方がよい只小供を別々に寢かすのを恐れるのは冬時寒いだろうと云ふのだが併し能く蒲團を被せれば自身のからだの中に温が出るから母親が暖めてやらいでもよい一所に寢るとはお互の身躰の爲めにわるい大人でも二人寢ると大變にゴッ〳〵衝當て氣持がよくない子供も其通りです又子供は寒いだらうとて温石とか瓶に湯をついで入れるとがあるがソンナとは仕ないでもよろしい暖めて置て夫れから寢かすなどは宜しいが温石を入るゝ抔は却て毒です是は廢めた方がよろしい只困るのは夜中に乳を欲して泣くのですが是れも慣し方によれば度々飮まずともよろしいから成るべくは別にするがよろしい懷寢の剱呑なるとは隨分乳を飮ませながら眠て仕まい息をとめた抔と云ふとがある瑞典では年に六十五人懷寢の爲めに殺した事があります今でも英吉利では千人に就て一人位の割に殺します其都倫敦では千人に四人位死ます又た「ポルミンハム」などは九人三分即ち生兒百人に付凡そ一人の割です日本では明かに分りませんがかゝる話があるのですから成るべく一所に寢るは避けた方がよろしい。

第四に呼吸器のお話ですが先づ胸膈の大きく發育する樣に注意しなければならん夫のみならず呼吸運動を自在ならしむとに注意しなければならす體操とか大きくなれば泳ぎとかは宜しいし固より空氣は新鮮のものでなければならぬから可成外に出すがよろしい遊嬉には外が一番よろしいです又聲のたつ樣にしなければならん夫れには唱歌なぞをさせても宜しい尤も小學校では餘程大きな聲を出して本を讀みますから別に唱歌をさせないでも宜しいが是等も肺を強くする一端です。

第五筋肉と骨格とに就て殊に注意すべきは身躰の位置であります私は御覽なさい此樣に猫脊だが斯う云ふ工合に延して居るのは困難です故に小供のうちから八釜しく言て胸を突出し肩を後ろに引込まして置るがよろしい是れが六ケしいなれば緒を懸けて俯けば痛いと云ふ工夫にして慣すがよろしい膳机は餘り低いのでは惡るい躰を前に屈ませるとなく俯かぬ樣に

(一四)

するは胸膈の發育に最も必要あることであります今日此にお出の方にはソンナこともありますまいが小供に重きものを擔がせるなどは往けません。

歩るき方に就て一寸申して置きたいとは是れまでの御婦人方は 斯う云ふ歩るき方がよかつたさうですが此頃は洋服などを着るから皆 斯う開いて歩るくが此方がよろしいです私なども癖がつきまして無理に開いて歩るかうと思ふと股の方が開いて 斯う云ふ形になつて歩るけませんソレ故洋服を着ても見苦るしいです婦人方の洋服で屈んで歩るくのを隨分見受けますが是れも隨分に見苦るしいです小供のうちから早く注意しなければなりません日本人の脚は多くは「へ」の字でありますが是は坐るのと一つは負ふのが原因と思ひます負ふたる兒は身躰の運動が自由でありませんから其發育を妨げ殊に胸を壓し足を曲る害があり又小兒の眠易き害があります是は御廢止致し度事です。

○○○小供の眠ることに就て倘お噺します生れたては乳を飲みにおきると云つて宜しい位です三週四週目位より十五分から半時間位引續て起きて居ますが五ケ月目位には一時間位をおいて眠ります十ケ月から滿一歳でもまだ眠る間の方が長いが次第よおきて居る時間の方が長くなつて終には晝は起き夜のみ眠ると云ふ様になります其眠らせ方について母親の氣つけ方があります其は時間を定めて眠らせる事で昨日眠ッた時間になれば必ず眠らせる様に何時から何時まではおきて居ると規則正しくして眠る時間が來れば騷がしくない様にしてチヤント眠らせなければなりません母兒雙方の爲であります二歳から六歳位までは寢ないで困ると云ふことがあるが氣を注けてみますと往々蒲團が煖たか過ぎるとか重過ぎるとか又食過ぎ可懼はなしを聞たとかで眠むれないのでありますから注意しなければなりません「フリードレンドル」と云ふ人は小兒の課業を左の通りにするがよいと申しましたが私も如何にもと思ひましたから其表を揭げて見ませう。

年齡	睡眠時間	休息時間	躰育遊嬉時間	精神的課業時間
七年	九乃至十時	四時	十時	一時
八年	九時	同	九時	二時
九年	九時	同	八時	三時
十年	八乃至九時	同	八時	四時
十一年	八時	同	七時	五時
十二年	八時	同	六時	六時
十三年	七時	同	五時	七時
十四年	七時	同	同	八時

まだ此外に五官や精神のことをお断すればするのですが只今頂戴した雜誌を拜見すれば已に前回に御聞になつたと思ひますし且つ時間も永くあるから最う此位にして止めませうと思ひますが只一言申したいことは好き傅の無いと云ふことです御承知の通り小供はみな其親に似るもので咳嗽聲までも親に似ると云ふ樣なものです所が佛蘭西あたりでは乳母の育てる方が多いから乳母の聲に似て親の聲には似ないなどと云ふことがありますた左れば母親は成るべく謹愼して子に望む所は母自らすると云ふ樣でなければあらぬ傅に任せるも子供が澤山あれば仕方がないが母親について居る間より傅について居る間が多といふ樣な事は成可避けたき事です傅は小供の師匠ですから餘程吟味して擇ばなければならぬ然るに何うもよき傅のなきは歎わしきことでありますが今の幼稚園は大概學校風に僅かの時間で家に歸ると云ふ樣な都合ですから成るべくは幼稚園の外に小供の預り處と云ふ如きものを設けて遊嬉させたあらば餘程によかろうと思ひます兎に角傅の養成が必要であらうと思ひますから序で故にお話して置きます。

格別面白くもないことを永々とお断して嘸御退屈であらうと恐縮に堪へません。(完)

○百人一首一口話（其七）

鈴木弘恭講
八木鶴二錄

喜撰法師

我いほはみやこのたつみ志かぞすむ世を宇治山と人はいふあり。

此の歌は。今古集にのせたり。格別にかくれたる所なき歌でありますО いほはいへと同じ。文字には庵家とかけど。波行四の音のいへと云ふを。五の音に轉じていほといふまでなり。人の入りて月日を經る所なれば。いりへを約めていへといふ之О たつみは。東南の方之。北を子とし。東を卯とし。南を午とし。西を酉として。方位を定めたれば。子丑寅卯と十二支を順に繰る時は容易に知らるべしО 志かぞすむは。志かは然之。此の如く住むといふと之О 一首の意は。私の庵は京都の辰巳の方角に當り。則ち東南の間の山に此の如く住みて居ります。ソレニ世を憂い山であると世間の人はいひます。愚僧の心には一寸とも憂いとは思はないで至つて安樂でありますよと之。憂きと云ふべきにうをいひかけて。世をうち山などいふは詠歌の常にて。人に逢ふを。逢坂の關にいひかけ。人を待に松ほの浦をよめるが如し。皆なかやうの例之と知りたまへ。さて語格は二段

切れの歌にて。三の句のしかぞすむと云ふぞが指辭にてすむといふ言にて結びて切れたり。又五の句の人はいふなりといふれが指辭にてなりといふ辭にて結びたる格でります。

○佳人と辨慶が欲しひ

某氏此頃ろ女學雜誌に連載したる「理想之佳人」の社說を讀み切りに此樣な佳人が欲しひと云ふ社友是空氏之に書を送つて曰く

或るとき大名中振舞の席にて辨慶の事物語りに出でしに皆々辨慶の欲しさよと評判ありければ末席より木下肥後守公定云ひ出て曰くイヤ其の辨慶は少しも欲しく候ハず判官殿の料簡になり候へば私の家來は殘らず武藏坊にもなり佐藤兄弟にもなり申すべし然れば何とぞ判官殿になり申度と久しく心懸候へども未だ得あり申さゞるこそ口惜くぞ候と憚る所なく放言しける」左れば貴君も牛若に成らるれば數多の淨瑠璃姫が得らるべく文明國の男子のように相成られ候はゞ亦た文明國の窈窕たる佳人は得らるべく候也。

○細君と下婢の行衛

問ふものあり曰く女學雜誌第百六號に細君と下婢の演說あり大層活潑にて面白かりき同第百七號に下婢の遣ひ方の演說あり緣が繫がる樣にて亦面白かりき其後は何如成行し乎。

編者答て言上す之は實に近來の大失策にて百六號細君と下婢の演說中「總理大臣と秘書官」との事を申したるゆへ警視廳より御叱りを蒙り第百七號に張紙をして題を變へたるゆへ又々一層の御叱りを蒙り候然し細君と下婢との關係は家政學の大切なる事柄にて女學雜誌の當に論述すべき本領なれば少と此の暑氣が編者の腦病に差支へなき折柄に又候相論じ可申候となり。

○小說神髓

蘇格氏著　ケチルチルス　(第十四回)

ラブサート夫人はゼ子と共に椽側に立出でゝ夕暮の景色を詠めらるゝ折柄馬の蹄の音其嘶く聲に合はせて意はざりき門外に聞へたり扨ては候の御入ならんと慌たしく且つ喜ばし氣に立出でゝ見ればパーチーなりき。パーチー打上りて一と通りの時儀を申したるのち少しく夫人へ密やかに申上たき儀ありとて其の御居間へ參る忠義一偏のゼ子は何事やらんと最と掛念して其の隣房に身をひそませて聞てあれば室內の話談漸やく聲高かに成り後ちには夫人が大ひに怒れる音上にて人を呼び玉ふとの聞こえたればゼ子は太たく心配して馳け入りたり之と同時にパーチーは冷々として出で行きたれば直樣近う居寄りて抑も何事の候ひしぞと問ひ申たり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

パーチーは室を出でゝ口邊に冷嘲の景色を見せ乍ら彼のマイク、フホスター、等の集り居る部屋に來り云ふやうは今日漸やく侯よ御すゝめ申し一と先づ拙者が妻と云へる名目にして彼夫人を皇后陛下に目通りせしむるとに定め早々其の趣きを書いたる手書を持參して夫人に示したるが中々の強情者で容易に承知せず其上え己れが少し油を掛けて地金を出したものだから滅相に腹を立てた此上は最早仕方が無いアラスコ先生の藥を盛るより工夫は無らう何卒早々に調合して而してフホスター、貴樣之を持つて行つて飲ませて呉れと云ふ實に犀狠の集る所ろ何れも是れ殘忍不敵の惡人なり。

ゼチは夫人の膝近う居寄りて之を伺ふに夫人は常に無く柳眉を逆立て眞とに惡つくき下郎ではある侯の御手書を持參し有り〳〵と其の御印までを据へたりなど申せど平生彼は侯の御印を預り居れば自身と何如なる事を致すやも知れず特に其の言ふが儘に言はせて置けばとう〳〵心中の罪みを吐出して妾はに無禮を極めたる言を申しかけたり抑も侯は何故に斯る惡人をば御信用に成る乎此後御目にかゝらば委細に告げ參らせ再たび其の御傍近うに寄せしめずなど物語らる此折フホスター手にコップを捧げて恐る〳〵出で來り茲は御氣欝を散ずる妙藥のよしアラスコ老人の調合し奉る所ろなり只今までパーチーが不敬の事を申し上げたるよしにて定めし御心持惡しう居らせられんと存じ持參致しぬと云ふ夫人は其儘に之を受取らんとさるゝをゼチは暫しと推し止め熟ら父の容貌を見るに何んとなく落附かざる躰にて頻りに手をわなゝかせ音聲も亦た常の如くならねば扨てはと心付きて父に申すやう、

父さんとしたとが奥樣にマア其樣なものをお上げなさるとは何事でせう左程に効驗の多きものに候わば妾わ先づ之を試してのちにこそ差上申さんイザ先づ妾わより頂戴いたさん

とて早や之を取りに懸ればフホスター大に驚ろき中々此の妙藥の大切なものを左樣無暗に飲まさるゝものかなど曖昧至極の遁辭を設けてコソ〳〵と出で去りたり。

ゼチはよゝと打泣きて夫人の御前に平伏しわが父に至るまで斯樣の惡計に與みすること抑も何たる心得に候やらん申わけ無きとに侍ると謝び申せば夫人は切りに嗟歎して早くも大に決するものゝ如く妾わは最早迯ても遁るゝようあし此處にて彼等が毒手に掛り靜かに相果つべし無らん後は侯に此の事情を細かに申上げ死する今端に至るまで敢て侯に背かざりき

と傳言せよあゝ早くも最と哀れに遺言せらるゼーチは之を慰さめて決して／＼御落膽ある可らず少しく思ひ立つとも候へば切度御躰に差支へなきよう保護し參らすべし今ま少々彼方に參りて其用意いたせば何卒御氣を落さず靜かに眠り玉へなど勵ましつゝ兼ねて預り置ける鍵數多を取出して何やらん心に思案しつゝ出でゝ行く。

フォスターはバーチーの所に來りて中々己れの力では得飲まされぬと平降すればバーチー苦笑ひして鼻にて返辭し然らば己れが往つて飲ませて來ようと突立上り彼のコップを受取りて出で行きしが暫らくして之を空にし我が働きを見よと言はぬ計り得々として歸り來りぬ。

ゼーチは彼方此方に立廻りて何やらん其の用事を濟まし心急き立ちて元の居間へ歸らんとすれば恰もバーチーが空のコップを持つて出で行くに遭ひぬ惶てゝ室に入つて見れば夫人は顏色青ざめて寢床の上に橫臥し氣息喘々として早や生氣半ば去りぬゼーチを見て蒼白の半頰に少との笑を含ませ最と低き聲音にて彼此と遺言せられんとすゼーチは歔欷して淚も出でざりしがキット心を定めて固たく之を抱き申し奧樣御心持を確かにしてよと叫びたり。

佳傳

○ショウジ、エリオット女史小傳（其二）　平野はま子

又た女史は謹愼にして常に內に自ら顧み決して倉卒に稿を草して以て世人の笑を招くが如きとを爲さゞりしとは宛もチヤロッテ、ブロンテ夫人の如くなりしかども其能く人情を察して得たる智識を最も濃かに能練の筆に寫し以て描き出せる所の人物は眞を穿ちて極味言ふ可らず讀者をして恰も躬自ら其人に接するが如く思はしむ則ち惡漢凶婦を見ては慷慨悲憤の情に堪へざらしめ義士烈女の段に至れば讃嘆措く能はざらしむ蓋し如此きは彼の性急事を叙するに周密ならざるブロンテ夫人の得て及ぶ處に非ず加之女史は上は身に綺綾を纏ひて九重の深宮に養はるゝ皇族紳士貴婦人より下は賤の伏屋に侘び住ひし日々の烟も漸くに辛き浮世を過ぎ渡る賤の女や花賣子供に至る迄の生涯性質及び其心根を探り得て殘す隈なし實にその照り輝く女史の慇愛同感の情は上中下等の社會に迄推し及ぼしたりと云ふべし而て女史は躬自らキリスト教を擯斥したりしかども世の常人と異なりてキリスト教徒たる者の義務責任を分析し又は之を說明するに當ては宛も之を十二分迄に理解せしが如くに巧に練筆を廻らせしかば能く精密に其意

を盡し熱信なる信徒も自己等の心術を洞見せられたる如く覺えたりと云ふ然れども女史の發する戯言及び滑稽はチッケンス又はザカレ等の天性自然に備はり思慮を勞せずして流出する秀句に比すれは稍劣りたる處ありと雖ども亦之には一種特別の性質ありたり即ち靜温たりと雖ども活潑の精神を失はす謙退すと雖とも卑屈の色を顯はさす能人の氣質特性痴鈍の點に至る迄察し得て一々其趣味を含ませしこそ世に匹類稀なる處なり人或は曰く世界之か右よ出つる者なしとて尊敬を受る夫の戯作の大家シエクスピヤがエリサベス時代の英國人民の狀態を寫せし如く女史はビクトリヤ陛下治世の初年頃の英國人民の景况を最上最下等社會を除くの外は其小説に巧みに描き出して眞狀を後世の讀者に知らしむる其功少々に非らすと實に然り而して夫人の小説は啻よ一個の美術的の產物として秀逸なるのみならす其中に教ゆる所の道德も亦高尚にして苟も此世に在りて眞正の生涯を送らんと欲する者は必す先つ其義務を盡さすんはある可らさるとを主張し又た假令天性利發の人たりとも或は果斷の力に乏しく或ひは自克の精神を欠く時は一度犯す所の其罪次第に之を導きて一事より他事に及し天晴れ賴もしき人をして遂に遁るゝに望みなき罪惡の淵に繫がしむるともある者あれば人たる者勉めて之を避けずんばある可からざるとを精神込めて活潑に描き寫せし趣き等ど彼の數多の小説家が互に競ふて結構を廻らせし巧筆中には古より未だ嘗て其匹ひを見ざる處なり又女史は好で讀者をして「如何に世人の稱して賤と云ふものと雖も只信と眞を以て勉めなば其業は潔白高尚にして其中に名譽も價値も存するとを知らしめんとを勉め常に天稟の文才を紙上に奮ひ巧に文を章どりたれども遂には形容文彩其度を越文辭華美に失するの評を免る能はさるに至れり抑も小説なる者は徒に文辭の風流艶麗のみを喜んて其結構を後にす可き者に非す凡ろ小説の傑作として世人に愛讀せらるゝ所の者は他なし只能眞正の人情實際の世態を探知して極細極微の點に至る迄有の儘に寫し出し讀者をして作者は如何して吾人が心中を斯點に洞覽して此も能眞を穿てるか何に依て斯まで吾人の行爲を探知せしかとの感を起さしむるの一點に在而して其小説中に活動する理想上の人物の行爲は即ち世間の現象を寫すの寫眞鏡ならざる可らず然らは苟も小説の小説たる務を全からしめんと欲る作者は勉て其理想上に構造する一世界に要するだけの材料を供へずんばある可らす安んぞ其他に無用の虚飾を長々と述て以て自らの

博識多聞を讀者に誇り或は文辭の華美を自負するの暇あらんや然るに惜哉エリオット女史は其晩年に二書を著はすに及んで稍前に述べたる過に陷りし者の如し盖は女史は固より其才衆に越え見聞も從て博かりければ遂には小說を以て己の學術上に於ける種々の意見を世に公にするの一方便となせり其主意たる又其意見たる高尙にして見る可き者多く若し之を別に一の學術の書として顯はれしめんには却て其當を得たるべけれ共一個の小說として之を讀むに當ては吾人甚た憾なき能はず殊に「ダニエルデロンデ」の如きは其說く所多く哲理に涉り之を小說と云ふよりも一篇の哲學論と爲さんとの寧ろ當れりと云ふも或は亦過言に非ざるが如し此ぞ女史の作中にて白璧の瑕瑾とも言ふ可き者にして實に女史の爲め惜むも尙ほ餘りある所なり此他女史は好んで詩を吟じ其吟咏中に於ても亦た其小說に於けるに均しき道德敎を吹込み且つ其思想の卓絕なると高尙なるとを以て屢々世人を驚かせしかども固より深く詩才に富めるに非ざれば一詩人としては最高の地位を占むるに難かるべし。

評に曰く。以上記述したる所は夫の有名なるジョウジエリオット女史の小傳及び其著書の性質の梗慨なりとす然れども六十年の生涯を僅に數葉の紙上に略記する者なれば孔だ粗に失して夫人の人と成りよりして其精神氣質德操及び平生の擧動風采に至る迄之を周密に知るに苦しむと雖も亦以て其一斑を覗ふに足る故に聊か玆に畀見を述へて女史を評せん。蓋し思ふに女史は博學多才にして文を能くし好んで著はす所の小說は眞を穿て讀者をして宛も自ら理想の人物の活動を目擊するの感あらしむるに至てはスコット、サカレー、ヂッケンス、ブルゥアの徒と並び立て愧ちす實に一世を睥睨する卓識なる小說家なりと云ふ可し加之に女史の交際上に於て或は家居日常の動作に於ても溫雅優美の德は恒に溢れて他人に其餘響を及ぼし人を化するとも亦高妙なりき此く女史は智識の點より論するも又其風采よりするも共に一點の瑕瑾を蒙らしむ可き所を見す女史の如き人こそ實に十九世紀否英國開國以降の女流中の榮華として吾人は喜んで稱讃す可きに惜哉玆に一の障害起りて女史をして此地位に立つを許さす遂に幾分か壯赫灼たる名譽をさへ墜すに至らしめぬ抑も其障害とは何ぞや曰く宗教及び道德に於ける女史の缺點是なり女史は信心熱き慈親の膝下に人と成り幼より能く宗教を理解すと雖ども何故か之を度外視して更に之に依て其意見を指南するをを勉めさりき是れ其障害の第一なり此く夫人は高尙なる奉教心なきか爲めに從て自克の精神に乏しく遂には胸中に燃ゆる情慾の烈火をは消すの勇なく千慮の一失とは云へ教法國法に反き其眞心にも許さゝる不義の契即ち妻ある紳士を夫として廿五年の長の日月を暗々と送りにけり是其障害の第二なり嗚呼人間は如何にて此の如く荏弱なるか女史の如き英才も卓識も此試驗の世界に出てゝ何の用をも爲さゝりしか然れは女史も自ら大に之を悔悟せし者の如く常に其著書中に此點に付て痛論せしかとも身は遂に之を改むるを得す若し女史をして道德上に瑕なからしめは其才識女史の如くならざるも尙ほ吾人をして其學問も人物をも共に女流の泰斗として景仰せしめたらんに事反對に出てしかは宛も將に輝き渡らんとする旭日の光線も尤も忌む可き不德の黑雲に遮られて終に吾人をして煌々たる光を仰くと能はさらしむるに至る遺憾と云ふも愚かなり然れは人たる者尤も意を注く可きは宗教と道德にこそ今此傳を終らんとするに當て雖す可き數字は即ち吾人は女史の如き女流を標準として進むを得へきも決して道德上夫人の覆轍を履むとなく又吾人女流有爲の姉妹將來文壇に立ち大に世を益せんと欲せらるゝ者は啻に筆を執て著作に日月を消過するのみならす宗教上德義上其信する所を行ふ處に依り能眞の風化を社會に及さんとを望むと云ふと是也。

●寄書

糸竹の道に遊ぶ女子に望む

大阪一致女學校生徒　稲井とめ子

なへて世のさかわ劣りはみなをみなの心ばねにかゝれるものなればよく〳〵こゝろすべきことにこそさるを糸竹歌舞のわざなどに世をおくりぬるはあさましきことなりかしいまの世は八重の汐路をばはるかにへだてしとつ國とまじらひゆく世にしあればわが國のまなびはさらなりとつぐにのまなびをもしり其ほか國家のためになるべきわざをば心ひろくふみわたりてをみなの道をつくすべきはもとよりなれば世の女子たち糸竹歌舞のみちに遊べるいとまあらばをみなの道を學ぶべきまなびにや身をいれあしをはこばせて心の玉をとぎねかしとあさき心のあさせに

うかぶうきくさの根なしごとさへいひ出て世の女子たちにのぞむになん。

○柳を見て感を起す　　同一致女學校生徒　　近藤りむ子

やなぎのみどりのいとたはやぎたるさまをなによたとへんまなやかにしてやさしく風のふくまゝに打なびきてさからふけしきの見ねざるこそめでたけれむかし加賀の國のちよ女がほこりかに、ひと抱へあれどやなぎハ柳かな、と己がすがたへぶこつなりとも心へさすがにをみなの道にうむかじとそのこゝろざしをいはれたるハ世に名だゝることのはなりけりそハとまれかくまれやなぎの性のやはらかさを人のこゝろにうつさばやかしこくも神のみこゝろにかなふべく、柔和なるものハ福ひなり、とみふみにしめされたるハいともたぶとくおもひ侍りぬある日中の島の柳のもとに遊びてこのあらましをさとりぬるも神のめぐみの御志るしにこうと感じつゝやなぎをほめそやして、

何事もやなぎの枝にならハばや風にをれたるためしさへなし。

●新報（此欄内に限り自由に轉載するを許す）

○東京慈恵醫院總會　去九日午後二時より同院の總集會あり皇后宮には兼て仰ふせ出されし如く午後二時御出門にて成らせらる御休息の後院長高木兼寛氏同院事務報告を奉呈し次に看護婦教養所卒業生鈴木さく、大石てる、近藤かつ、板谷こと、吉岡ようの五名へ卒業證書を授與し了て右五名が病室性にて卒倒せし者の看護方の演習を御覽に供し次で院長副院長の御先導にて各病室を御巡覽親王並びに御息所大臣隨從續いて會員有志等巡覧し暫時御休息の上四時過還御あらせられしと云ふ當日の來賓は三條内府黒田總理大臣を始め貴女紳士數百名なりし由なり。

○慈善會員慰勞會　先達て上野公園にて開きし養育院慈善會の會長高崎男爵夫人には去八日會員の方々を芝離宮に招待して慰勞會を開かれ陰天にもかゝハらず來會者六十餘もありていと賑かなりしと。

○婦人矯風會の寄附金　東京婦人矯風會の會員諸氏には此程米國婦人矯風會の會館を同國シカゴ府に建築せし其工費中に日本貨金四拾圓を寄附するとに決し同會の書記佐々木豐壽子の名を以て去十一日横濱扶鐵のシチーゾフ、シドニー號にて米國婦人矯風會の會計部長イスター、ポー孃の許へ送付せりと。

○美術展覽會褒賞授與式　前號に記せし如く去十三日上野公園内に開會の美術展覽會に於て新製品褒賞授與式を執行され美術協會總裁有栖川一品親王殿下及佐野會頭其他朝野の紳士百餘名臨場あり先つ總裁殿下令詞を述べらる次に褒賞を授與し終りて佐野會頭の演說あり出品人總代瀧川總助氏答辭を述べ此式を終れり當日銀牌を受けしは野口幽谷、久保田米僊、柴田是眞、東京職工學校、加納夏雄、益田香遠、瀧川總助、並川靖元、苳藏六、飲田新七、起立工商會社、榛原直次郎、小川松民の十三氏にして此外野村文擧氏外三十二名は各銅牌を受け賞狀を受けしもの五十三名ありしと云ふ。

○婦人教育會常集會　大日本婦人教育會にては本日午後二時より帝國大學講義室に於て第四回常集會を開かるゝよし。

○女訓導　高等師範學校卒業生一瀨房子、小谷野千代子、清水鶴子の三氏は去十四日高等師範學校訓導を命ぜられたりと。

○産婆會合　府下の産婆は去十四日午後一時より東京府議事堂に會合し組合及規則制定の事を相談し武衛生課長及課員も臨ありし由。

○學修學館　麴町區有樂町三丁目一番地に新設せる同館は女子部をも設ふけて普通學科並に裁縫編物等を教授する由。

○仙臺の女學校　仙臺哀矜會にては近々仙臺區東通花京院へ佛國女學校を設立し佛國の女教師を聘し語學裁縫編物音樂等を教授する趣き又た同地一致教會にても東三番町北目町通へ女子英語學校を設立する由。

○機知會　大阪の南宗派の畫家矢野五州、水原梅屋、森琴石、姫島竹外等諸氏が畫學研究の爲めに設立したる同會は去る十三日同府立博物館にて雅會を開きし由當日第一席は先春園の煎茶席、第二席は梅本社の抹茶席、第三席は山中、後藤、播吉の古書展覽席、第四席ハ新書畫展覽席、第五席は揮毫席、第六席ハ酒飯席なりしとぞ。

○婦人英語會　大坂の本間重慶氏の細君はる子は今度東區新町一丁目二十六番地に婦人英語會と云ふを設立し學齡外の婦女子に教授せんと出願したりさ。

○上毛婦人教育會　同會は會頭に佐藤知事の北堂を推選し千谷判事の夫人を副會頭に選擧せし由。

○豚岡婦人教育會　同會ハ去る六日同地西蓮寺に第三回を開きたるに百十余名の參會者あり茶の湯、女禮、毛糸編物等を練習し艸香唯道、小野島行薫、鈴木せん子の演說ありしと。

○婦人令德會　佐賀の婦人令德會ハ去る十日より毎日英學を講習するとに決したる由又毎月第一第三の日曜日を以て午後一時より學術技藝其他婦人の要務を講習談話し或は同日に文近三以上を出し置き次會に持參して批評したる後最高點の者には夫れ〳〵賞品を與ふるとのと。

●海外女報（同前）

○獨逸の女儒　獨逸にては女儒餘り盛んにてはあらざりしが此頃ろチウビンゲン大學教授の夫人エーベル女史は彼のライプシックに於てワットーピータルス夫人か設立したる婦人會に入り大に盡力せらるゝより從來になき活潑の運動をも見るに至らんとすと云ふ

○日本の女子專門學校　五月のグーデースレーデースブックと云へる雜誌には日本東京にて女子專門學校を設け英國より教師を雇入れ政府は六年間を期して右英國婦人の委員達に學校の監督を全く委任したりとあり恐らくは彼の女子獎勵會の東京女學館の事を多少誤まり傳へたるものか

○婦人禁酒會員の接吻　米國婦人禁酒會にては公けの集會に於て白リボンの標しを着けたる人を見掛けて其の會員たるとを知らば則ち之に接吻して同情を現ハすべし否な然る可らずとの議論盛んなりしが會頭ウィルラルド孃は接吻に代ゆるに握手を以てすべしと忠告せられたるよし也左もあるべし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○子供のはなし

小學校先生のお話（賢こい仕立屋第三）

暫らく待ちて居ますうち怪の化物は出て來まして墓場の方へ行きます能く聞けば酒臭き臭がする化物に酒氣がある筈はなし必定人の化物に違ひなしと思ひまして其次の夜件の化物が來る時熊の皮を着まして大きお熊となり飛び付きましたに化物は驚き遁る其機に化の皮が少し脱げます其時熊は急に飛び付きまして其皮の中へまきこみまして化物を縛り能く見れば化物にはわらで人間の化物と身をやつし墓場を發きて物を竊み人を驚して物を奪ふ盗人でありましたこれも國王に連れ行きまして豫ての褒美を願ひましたゆへ此時國王は致し方なく姫を與へました先づ婚禮の式も濟み姫君の室に寢て居りましたに或夜「次郎さん、待よ、上着はまだゞ、要はん御前の短胴服は‥‥」と寢語を申しました姫はこれを聞豫てより氣に入らぬ夫が今寢語に其身の仕立屋なることを顯はしたれば父に告げて離縁を求めました國王は今夜夜半頃數多の兵を遣はすゆへ彼奴の能く寢入たる時戸を開けよされば兵隊は彼を陰かに舟に乘せ遠島へ流すべしと申しましたこの事を或る下女が聞きまして何思はず不圖仕立屋に告げました其夜何心なく二人共寢まして仕立屋は狸寢をして居ますと姫はソツト戸を開けました時に寢言が聞へます「次郎はん、待よ、上衣はまだゞ、要はん御前の短胴服は‥‥一たび撃てば七つを仆す‥‥此手で縫ば‥‥此手高坊主閉口した‥‥二人の強盗も‥‥角馬も化物も‥‥此手此手‥‥戸口に立兵隊‥‥此手で仆る）とこれを聞て兵隊は恐れて遁げ去りましたそこで國王も致し方なく其王國の半分を與へましたと申すお話しがありますこれは面白くなき話であるけれど仕立屋が少しの智惠があつたゆへ出世をしたと申す話です其他此の類の話はまだ澤山でざる追々にお話しましよが皆人〻の勉強して働く事なれば如何ある貴き者にでもなれると云ことでありますから皆さん精を出して勉强なされ後はおいゝ。

萬國女子大會景況錄　其二

スタントン女史は其演說を八段に分て滔々と述べられたる其荒增を簡短に申せバ、

一〇　歡迎の事

今を距る四十年前即ち千八百四十八年紐育に於て初めて婦人供の集會を催うしたる處ろ其年早くも紐育州に於て有夫者財産所有の條例を發布せしむるに至り其后

ノハヨ、インヂアナ、マッサチウセッツ、ペンシルバニア等の諸州に至るまで皆な之に倣ふて婦人の爲に便利なる法律を設くるに至りぬ然るに其后四十年を經たる今日即ち此の四十年后の萬國女子大會には合衆國の各州は申すに及へず大英國、佛蘭西、フヒンランド、伊太利、スエーデン、印度、デムマーク、ノルエー等より各其の議員を送り茲に一堂に相會するを得るは何たる喜びぞ。四年前りパブールに於て余とアンソニー孃との爲に面接會を催されたる折の談一に何卒萬國女子大會を開きたくとの發議者ありて遂に所々へ之を問合する爲に委員若干を擧げ之を各國の婦人方に聞介へせたる處ろ大抵何れも皆な大に之を賛成せられたれば即ち今日遂に此の會あるに至り而して彼の米國女子投票權會にて專ぱら其運びに盡力して之を此の米國にて催うすと爲りたり。諺に云く世界は吾國人類は吾國民なりと諸君と余等と皆各其國を異にせるとは云へ今は決して異邦の人々とは思へず況んや之れ女性が蒙る不正當の壓制は萬國に通じて存在し而して此の萬國に存する不正當の壓制が即ち吾々各邦の婦女子を結んで一躰とするの帶と爲れり。

二。　女性の束縛

吾等の足は鐵の靴に容れられ吾等の顏にはベールを被らせられ牛馬同樣の重荷を引かせられ愚人罪人共と同樣に取扱へるゝとも何れも皆な同樣の束縛なり古來吾等女性に於けるの束縛を慨歎したるもの甚へだ多しマーリーウオルストンクラフト、マダムデスタル、マダムローランド、ゼノヂサンド、フレデリカブレーメル、バーレットゾローニング、ゼノゲエリノットの類皆な是れ也左れど萬國の女子一堂に集つて政事上社會上宗敎上學事上勞働上等に關する女性の自由を需求せんとするは即ち今日が初めて也思ふに何如なる涙も之を法律上に印せざれば無効なるが如し故に女性に與へらるゝ自由を確收せんとするには今や是非とも法律上の一聲を必要すべしと思はるゝ也　(I think that most of us have come to feel that a Voice in the Law is indispensable to achieve Success.)

三。　輿論の變化

最初女權の擴張に盡力したる婦人方へ朋友に輕んぜられ公衆に卑しまれ敎には若しめられ議談には嘲けられ文書には誹られたるにも係らず今は輿論の感覺大に一變したり五十年前は此の米國に於てだも女子は尙ほ男子が一種の奴隷にてありきる然るに今は學校も之が爲に自由に開かれ職業も亦た之が爲に自由に得られんとするの狀況に至りぬ現に斯く萬國の婦人共に一堂に集會して斯く堂々と女權の演說を爲すを得るに至りしによりても亦た之を推知し得べし云々

四。　政事上に於ける女子の地位

政事上に於ける米國婦人の地位は過る五十年間に於て大に增進したり抑も此米の合衆國には人民あり舊世界には政府と人民とあらん思ふに彼の敎會に法王なく國に王なく家に御主人なきの自由國は必らず此の合衆國の如くにして追次に各所に起るべし余は諸君に自國を貫するにはあらず何卒此の民主の精神をば彼の舊世界の人々にも確認せしめんと欲するなり即ち自治の制度と家内の制度との尤も安全强固なるとは現に六千萬の人民が一樣に實證する所なるよしをば彼の魯士亞の皇帝英國の王權黨なんどに示したく思ふ故也蓋し如此にして而してのち女性も亦た政事上に大に權を有するに至るべき也云々

五。　先進逝かんとす

吾々の同志にして既に過去り逝きなる人少なからず彼のガリソン、フヒリップス、チヤンニング、ローガース、パーレー、エドワードデビス、ルクレチアモット、ゼヨセフヒンヅリッフヒング、ニコルス、ゲージ、フホスター、チヤイルド等の紳士婦人は何れも皆な逝きたり而して吾々も亦た將に往かんとす此に於てか切に向來の若娘孃に大に需むる所ろなきを得ず吾々は彼のイスラエルの民の如く人の輕蔑と妨害との間だに途を開き兎も角も約束の地に至るの方角を定めたり然れども之れより尙ほ數多の妨害あらんと必せり若き娘兒諸君の任重し而して之を顧慮するの必要も亦甚はだ大なる哉云々

六。　集會の目的

吾々斯く集り而して何の事も無く散ずるは尤も宜しからず若し一國の文明は其國の女の有樣にて知らると云ふときは此の大集會の内の有樣によりて全世界が吾々に於けるの思想を幾等の上に高めんと短きにあらず左れば異邦人もユダヤ人も舊敎徒も新敎徒も多少の異見によつて大躰の運動に背違するが如きとなからんを切望す云々

七。　女性は何如に投票する乎

世人動もすれば問ふ女性若し投票の權を有せば彼の一國上の大問題ヿ關しては何如んか投票するぞと曰く吾々は正に禮ひ義に依て萬事に答ふるの外なし彼の漁業事件に付て何如んと問はゞカナダ若し岸頭三里を要するとならば之を持たしめよ鮭が疑問の要點であらばカナダ人をして安んじて之を食はしめよ而して吾々は亦安んじてカキ、シヤッド、鮭を西湖及びカリホルニアより漁し得て食すべしと答へん。魯士亞政府が其政敵を送り返さんとを乞ふの事件は何如んと問はゞ吾々は否なと之を返す可らずと云はん。萬國印書版權の事件を何如んと問ば吾等は可成之を賛成せよと云はん。大統領國庫餘裕を生ずるを殺ふるとに就て何如んと云はゞ吾々は宜しく國財を返し年貢を輕くせよと云はん。憲法を改正して宗敎主義を入れんとするの條何如んと問はゞ吾々は之を不可なりと云はん。蓋し吾々も亦た國事上の問題に對して無知にあらざる也云々。

八。　吾々の辯の開かるゝ時

吾等の辯の政事上に開かるゝ時は政事更に仁惠と爲り更らに慈悲深くなるべし云々。

（正誤）。前回墺太利亞ニウカッスルとあるはアウストラリアの云々の誤り也

廣告

宮内省御藏板

婦女鑑

全六冊

此書ハ宮内省ノ御藏板ニシテ婦人ノ亀鑑トナルベキ和漢洋ノ孝女烈婦貞女賢母等ノ言行事蹟ヲ蒐輯シ且ツ圖画ヲ挿入セラレシモノニテ既ニ本年一月
皇后宮ヨリ華族女學校ノ生徒ヘ御下賜相成リ實ニ婦人ノ課讀又ハ修身口授用書トシテ其徳性ヲ涵養スルニ於テ最モ有益ノ書ナリ今般弊舗ニ於テ發賣ノ御許可ヲ蒙リ候ニ付婦人ハ勿論苟モ婦女教育ニ志アル諸彦ハ必讀アランヿヲ切望スル所ナリ

但シ右書ハ各貴捌ヘ差出シ有之候間何卒御手寄之書林ニテ御講求被下度候

東京書林 吉川半七恭白

定價金壹圓 郵送料金四拾錢

女學雜誌第九十七號に批評あり

女學雜誌代金滯候御方

にして每々御催促申上候とも尚ほ御拂込無之仁あり而も其御住所すら分明ならざる向も候まゝ如此き御方に限り以後雜誌上に於て御催促申上候に付不惡御承知被下度候但し本社は專ら情義を重んじ候心得に有之決して輕々しく右樣の取計らい不仕存候得共何分三四ヶ月以上も滯り居候上每々の御催促に一報を寄せられざる諸君に對しては實以て不得止の處置と御許容ありたく預め申上置候也

廿一年五月十五日　女學雜誌社會計掛

教育時論第百拾號目次

明治二十一年五月五日刊行

版權所有

社說●師範學校の生徒は何故に從順の美德を失ひたるか**教育**●小學教育論(橋本武譯)●教育事業の種類(杉浦重剛)●教育上の二疑團(蓮田文翁)●遠藤秀三郎君に質す(中島半平)●讀本批評(靑二齋)●單級法編制ノ顛末(山田邦彥)**理科**●動物の略說(木下邦昌稿)**哲學**●神經系統論(隱西生譯)**傳記**●彌爾學術傳(田中登作、町田則文合譯)**內外雜纂**●話の種外數十件

本誌一部金九錢郵稅壹錢見本に限り郵劵代用不苦

發行所　東京下谷區練塀町十四番地　開發社

●女子必讀

いらつめ第十一號

每月第二土曜發兌

一冊八錢一年分郵稅共九十二錢

目次

社說○結婚論●家政○育兒法○人工の片輪○急病治療法●小說○空行く月(密書)●流行○流行の衣服羽織地○ハンケチ○靴○烟草入きせる○婦人の洋服○新製鳥羽の簪(密書)○夏帽子●化粧○化粧藥○肌のきメを眞する方●學藝○蚊の話(密書)●文藝美術○音樂獨稽古○唱歌○世界第一芝居正本○御笑草●批評○浮雲●雜纂○四件●寄書○束髮の論●月報三十二件●餘興○新作ナゾ四(懸賞)●醫學士竹中先生口述通俗衛生學●唱歌(譜附)

發行所　東京湯嶋天神町一丁目五十九番　成美社

勝安房君題著
津田仙君著

酒の害　全

一冊定價郵稅共金拾錢

●四冊以下一冊に付全前●五冊以上十冊以下一冊に付割引價五錢(但遞送料は別に申受く)●百冊以上一冊に付割引價四錢(全前)●百冊以上一冊に付割引三錢(全前)

出版　東京　婦人矯風會
東京麻布本村町　學農社雜誌局
賣捌　全京橋區日吉町　警醒社
全　女學雜誌社

薔薇幷に盆栽廣告

今般駒込動坂千駄木藪下に於て薔薇及盆栽陳列仕り十七日より例年の通り開園仕候間御遊覽を希ふ

動坂美香園河村房太郞。同所薔薇新千駄木藏石卯右衛門。同所千樹園虎之助。駒込藪下淸大園藤吉

●六合雜誌 第八十九號 五月十五日發

○適用の時代、批評の時代　徳富猪一郎
○道徳宗教職業及罪惡の關係　高橋五郎
○基督の教へし道徳宗教　デフォレスト
○自然有神論と基督教有神論　山田寅之助
○五書批評論集第一編　アメルマン
○有効の徳育　小崎弘道
○加藤弘之君及ダルウィン氏　ゴルドン
●雜記○基督教の性質○社會の顯象○日本人第二號棚橋君の國教論を評す（寄書）●一册代價金拾錢

東京京橋區日吉町廿番地　**警醒社**

鐵筆將軍著
明治之細君

定價金八拾錢　郵税金貳拾錢　クロース製極美本石版密畫入

書籍の眞否は世間自ら公評あり故に本書は流行の奴隷となり賣藥の效能書然たる過賛を喋々せず然れども其果して世間流布の二三十錢の安物と其價値を同ふするか其文章は何如其意匠は如何其用紙印刷挿畫製本等は如何請ふ江湖の諸君御購讀の上此等の諸問題を解せられよ

東京本郷元富士町二番地　**盛春堂發兌**

○高等小學校教科書 文部省撿定濟及減價廣告

藤尾六郎君著　田口卯吉君序

實地應用 家計簿記法
附帳簿書式

全一册　改正價二十錢　郵税十四錢　舊定價四十錢

同例題

全一册　改正價十錢　郵税十錢　舊定價十八錢

此書や唯朝夕數字をだに記入せば一家の出納細大漏さず之を明にするを得せしむる者にして公私の學校生徒は固より官吏會社員農工商に論なく凡そ一家を經營する者は必ず購讀すべきの要書なり

○發兌　東京々橋區彌左衞門町　**經濟雜誌社**

○賣捌　東京小林、丸善、博聞社、集成社●大阪梅原、丸屋●京都大黒屋●横濱丸屋●仙台金港堂支店

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

女學雜誌社出版書目

船越鼎太郎君著
產婦小兒 攝生法 一冊十八錢 郵税四錢

田口卯吉君結髮沿革附錄○和崎義路君校○巖本善治君跋
渡邊鼎君著
束髮案内 美製小本八十頁細圖入 定價十五錢 郵税四錢

鈴木弘恭君講述○山村亮作君筆記
つれ〴〵艸講義 定價十二錢 郵税四錢

鈴木弘恭大人著述○小中村淸矩大人評
改正增補 文法口授 一名和文獨案内 定價十八錢 郵税四錢

統計局次長世良太一君序○統計協會員呉文聰君序
朝野新聞記者横山雅男君著
婚姻論 定價三十五錢 郵税十四錢

巖本善治編
木村鐙子小傳 定價十錢 郵税六錢

中島湘烟女史著
善惡の岐 定價五十錢

心の寫眞 一名嗜好及性質の記錄 定價廿五錢 郵税八錢

通信女學講義錄 毎月刊行 一冊定價廿錢全國無郵税

發賣所 東京々橋區日吉町八番地 **女學雜誌社**

發兌	
四月。七日 十四日 廿一日 廿八日	
五月。五日 十二日 十九日 廿六日	
六月。二日 九日 十六日 廿三日 三十日	
七月。七日 十四日 廿一日 廿八日	

定價	
一冊。五錢 郵税。一錢	(但府内無郵税)
十冊。四十八錢郵税。十錢	(同前)
半年分 一圓十七錢	府外は 一圓四十三錢
一年分 二圓卅四錢	府外は 二圓八十六錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但〻紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部の注文を要〻以上半頁分毎に十部增の割合と定む

一行 一回 (廿七字詰) 前金拾錢
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但〻不道德なる事物の廣告は謝絕す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町駿々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町眞明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文壽堂○横濱住吉町角田晃貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入淨集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西内大工町新々堂○相州小田原綠町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十一年五月十七日印刷
明治二十一年五月十九日出版

發行所 東京京橋區日吉町八番地 女學雜誌社

編輯兼發行人 東京京橋區日吉町八番地寄留 巖本善治

印刷 東京芝區源助町十一番地寄留 森田豐

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 *sen*. By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.

Edited and published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tôkyô, Japan.

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY